NIE Newspaper in Education 教育に新聞を

北中城村喜舎場に住む安里要江（としえ）さん（84）は、激戦地となった南部を家族ら18人で逃げ回った。次々と家族を失った末にたどり着いたガマで、餓死寸前にまで追い込まれ、最後は2人の子や夫、母親ら肉親11人を失ってしまう。日本軍による壕追い出し、幼児虐殺、砲弾の嵐。安里さんの逃げた道のりをたどり、戦争に巻き込まれた庶民がどのような悲劇に至ったのかを追体験する。

「3月末、北部に疎開しようとしたものの、4月1日の米軍上陸とぶつかってしまい、追われるように南下していった。激戦の南部をさまよったのは、結核を患った夫、4歳の長男、9カ月の長女、父母、義父母、兄弟の家族ら18人。いつ死ぬかも分からない。戦闘の最前線を回って恐怖の中を生きた3カ月だった。戦争は人間が人間でなくなる。若い人たちには、そのことを知ってほしい」

安里要江さん

逃げ回った恐怖の3カ月
戦争が肉親11人奪う

1944

8月22日　九州に疎開するおいを乗せた「対馬丸」が米潜水艦によって撃沈される。戦争で初の犠牲者。家族皆が疎開をためらう。

1945

東風平村屋宜原の夫筋の実家で12人が生活。

3月23日　米軍の艦砲射撃が始まる。

25日　米軍が具志頭村港川から上陸するとの情報で、家族11人が日本軍のトラックで北へ向かう。

26日　安里さんの実家のある北中城村喜舎場で途中下車。墓に隠れて生活。

4月1日　米軍が読谷・北谷海岸から上陸したとの情報を受け、11人（うち子供5人）が南へ向かう。

2日　首里平良町の「西森の壕」に避難。

9日　銃撃の音が近づいてきたため、壺川の壕へ移動。

29日　那覇の市街地からも銃撃戦の音。屋宜原へ向かう。途中の南風原・山川橋付近で夜中に艦砲の集中攻撃を受け、1人しか入れないたこつぼ壕に分散して丸1日身を隠す。

5月1日　屋宜原に到着。山の壕に隠れて、13人が生活。
5月中旬から北中城の実家の両親ら5人も合流。

6月1日　米軍が与那原から上陸したとの情報を聞き、18人が喜屋武方面へ向かう。

艦砲弾がひっきりなしに落ちてくる中、東風平、具志頭を通り、ギーザバンタに出る。海を埋め尽くした米艦船を見て引き返す。道はたくさんの住民と敗残兵でごった返している。

6日　どこのガマもいっぱいで入れず、真栄平の豚小屋に隠れる。艦砲弾の破片が刺さり、兄嫁が死亡。一行の犠牲第1号。

8日　国吉で父とはぐれる（戦後、収容所で再会）。道路は何千人という住民と日本兵が右往左往している。逃げ惑う人の群れに、砲弾が容赦なく降り注ぐ。道端には遺体が折り重なっている。

昼ごろ、真壁で迫撃砲を受け、実母が死亡。4歳の長男も顔に破片を受ける。

9日　1日からサトウキビの汁以外、ほとんど食べていない。畑の排水路に隠れていたところ、米軍の油脂弾を落とされ、義母が焼死。

10日　小さな岩のくぼみに隠れる。外にいた義父が艦砲射撃を受け、即死。

11日　逃げる道には遺体がごろごろ転がっている。遺体につまずいたり、踏み越えて逃げる。「死ぬ時はみんな一緒に、一撃で死なせてください」と何度も祈る。

避難壕を探して近づくと、日本兵が出てきて「ばかやろう。君たちがうろうろしているから戦争はここまで追い込まれたんだぞ。電波探知機に探知されるから出て行け」と追い払われる。それから日本兵が怖くなった。

夕方、地元の人に教えられ、伊敷のカーブヤーガマ（轟の壕）にたどり着く。一緒に入ったのは9人。横になるスペースもなかったが、砲弾の音が聞こえないだけでも「天国」だと思った。

12日　おにぎり4個をもらい、9人で分け合って食べる。屋宜原を出てから11日ぶりの食事。

日本兵が「子供を泣かすな。泣かすと殺すぞ」と銃剣を見せながら脅す。同じガマの中で、実際に日本兵が子供を殺したという話も聞いた。住民の持っていた黒砂糖を日本兵が取り上げたため、取り返そうとした子供を撃ち殺したとのことだった。

16日　石油のランプが切れ、ガマの中は真っ暗に。数百人が声をひそめて過ごす。食べ物もなくなり、ガマの中を流れる川の水だけを飲む。

参考：『沖縄戦・ある母の記録』（高文研）

9カ月の長女の呼吸が弱々しくなり、ついには餓死。「生まれて13日目から10・10空襲を受け、わずか9カ月で命を落とすまで戦争に巻き込まれた生涯だった。『戦争中にあなたを産んでごめんね』『ごめんね』とさすり続けた」。真っ暗で死に顔も見られず、指先を目の代わりにして顔の輪郭や体をなで回していた。2、3日抱き続けた後、ガマの奥に埋葬した。「生きたらいいのか、死んだらいいのか分からなくなった」

ガマの闇の中では衰弱した人が次々と死んでいく。餓死寸前で「芋が食べたい」「ご飯が食べたい」と大人が発狂状態で叫んでいた。

18日　米軍の馬乗り攻撃を受ける

24日ごろ　米軍が投降を呼び掛け。2回は拒否したが、3回目に沖縄の人（宮城嗣吉さんか）が入り口に立って呼び掛けたのに応じて、数百人が外に出た。その後、夫は別の収容所に送られた。

25日　豊見城の伊良波収容所を経て、宜野湾の野嵩収容所へ。下旬に診療所に預けた義母（義父の本妻）とはぐれ、不明に。

3月　夫と再会。宜野座の古知屋収容所に移動。

12日　夫が栄養失調で死亡。

10月2日　戦争中、顔に受けた破片が原因で4歳の長男死亡。
収容所で次々と親類を亡くす。12月までに肉親11人を失った。